

渡辺克己著



第一章・昭和通りかいわい



第一章 ● 昭和通りかいわい

【写真】 大正年代の白雉城大手門

- ・ 第一高女と武家屋敷
- ・ ユウレイが出る
- ・ 皇太子殿下の行啓
- ・ 思い出の親子松
- ・ 流された長浜神社
- ・ 白雉城と哀話

奥付け／デジタルブックについて

発行に当たって

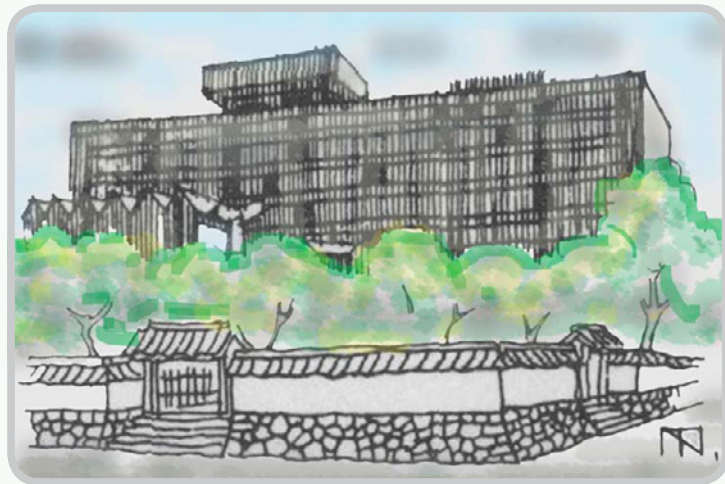
▽この電子ブック「大分今昔」は昭和 37 (1962) 年 11 月から翌 38 (1963) 年 12 月末まで、1 年 2 カ月にわたり大分合同新聞に 295 回連載され、連載から 20 年後の昭和 58 (1983) 年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和 37、8 (1962～63) 年当時のことです。

▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和 58 (1983) 年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。



大正年代の白雉城大手門。門の上の鐘楼がなつかしい

新県庁舎とありし日の武家屋敷（挿絵：田中 昇）



第一高女と武家屋敷

遊歩公園の並み木のかげに、老婦人がふたりたたずんで新県庁舎を見上げていた。コンクリートの鋭い直線が深くなった秋空をくぎって、新しいガラスは午後の日を反射していた。

「昔のおもかげはどこをさがしたって、もうなくなったわね」
老婦人は小さくささやきあっていた。ふたりの目の奥には傍若無人にそそりたっている九階建ての新県庁舎ではなく、緑にかこまれた第一高女の、古ぼけた木造建築がうつっていたのにちがいない。そして、音楽教室から流れてくる合唱や、運動場の若やいだざわめきも、耳の底によみがえっていたかもしれない。

あのころは第一高女のかきねにそって家老屋敷のいかめしい門がまえば二つ並び、かわらを置いた白い土べいが県庁のお堀に接近し右に曲がっていた。その向かい側に県会議事堂のカラタチの植わった石がきのへいがまっすぐにのびて左に曲がる。つきあたりは県庁（府内城）の石がき、その上からのぞいている

大きな松の木。お堀は広く美しく、ハスの葉が露をのせて広がっていた。

「いま電話局になっているあたりに大分幼稚園があり、いっしょに君が代やほとポッポを歌ったり、県庁の堀でカエルの子をとったり、サクラの実で口をまっかにしたり…」

大分バスの故佐藤恒彦氏の思い出を語る本の中に、こんな場面がなつかしく描かれている。

県庁の堀とその周辺の風物はいまの中年以上の人々の胸の中には、いつでも、パノラマのようにあざやかによみがえることができるほど、強く焼きこまれているのである。

いまの県教育会館のところには長屋門をめぐらせた家老屋敷が、こども心にうすきみ悪く古ぼけて建っていた。草ぶきの大きな屋敷から、いまにも二刀をたばさんだ老武士が、こわい顔をして歩き出してくさうな、そんなたたずまいであった。こどもたちは「お化け屋敷」といつてさけるほどだった。その向かい側のいまの電話局に当る付近が大分幼稚園で、ここは幼稚園になる前に、いまの金地小学校の前身の大分高等小学校が校舎にしていた。その建て物は版籍奉還までは府内藩の勘定所であったから、その向かいの家老屋敷は、勘定奉行が住んでいたらしい。

ユウレイが出る

昭和七（一九三二）年に県教育会館が建築されるとき、その敷き地内のあちこちを掘りかえてみたそうだ。勘定奉行だっ

た屋敷だから大判、小判がどこかにかくされているかもしれないと思つたらしい。このとき、いまの昭和通りに面している辺りに古い井戸があつて、この井戸からユウレイが出るといううわさもあつたがきれいに埋めてしまった。

ここには、草ぶきの屋敷の方に医者が住んでいて、大正初（一九一〇）年にそのお嬢さんが大分高女に通学していたので、えび茶のはかまの女学生が遊びに寄っているのをよく見かけたという。また昔は中間が住んでいた長屋門の方には、女学校の先生が間借り生活をしていたこともある。そのように現代の人間のおいがしているのに、奥深く薄暗い感じの武家屋敷には、封建時代の人間のがきとか執念といったようなものが、冷たい煙のようにゆらゆらとまつわりついていたのか。それをこどもたちは敏感にかぎとつて「化けもの屋敷」と、まゆをひそめてささやきあつたのだ。

旧県会議事堂（戦前の公会堂）のあたりの武家屋敷にも、そんなこわい話が生まれていた。主人が大切にしていた邸内のミカンを、女中がこつそりもいで食べた。それを主人が見つけて殺した。それらしい屋敷内に実るミカンは、皮をむくと血が出るという怪談である。

いまの医師会館のところは北の丸といい、藩主の隠宅があつたところで、そこに初代大分県権令（知事）森下景端が岡山県から赴任すると黒住教の教会所「宗忠神社」を建てた。森下権令はたいへんな黒住教信者で、住居にしていた堀川の酢屋幸松雄三郎方から毎日登庁するのにもえぼし（鳥帽子）ひたたれというありさま。出張先ではまず教義を説いて県民に黒住教の入

信をすすめるほどであった。だから県庁職員は、信者になってごきげんをとるものが続出したということだ。当時佐賀関の神主で、小野という雄弁家があり、黒住教の説教をやらせたら非常なできばえだったので、権令は大いに気にいつてただちに一等巡査（いまの巡査部長）に登用した。その後とんとんびょうしの栄進で警察署長にまでなった。

そんな状態だったから、森下権令が依願免官になると、教会所の方もさびれる一方、いつか草むした場所となった。松栄神社のところも、神社が堀川から遷座するまではこわいヤブであった。

こわい場所はもう一つあった。戦前までの県会議事堂（大手通り）は藩政時代の獄舎のあったところで首切りも行なわれたという。カラタチをめぐらせた議事堂は人の出入りのなくなる夕暮れどきから鬼気がただよった。いまは、当時玄関正面にあったソテツだけが昔のおもかげを残して葉を茂らせている。

皇太子殿下の行啓

県庁前の道路がひっくりかえるようなにぎわいをしていたことが一度だけあった。

明治四十（一九〇七）年に皇太子嘉仁親王（のちの大正天皇）が大分においでになったときである。

「皇太子殿下の行啓」というので県民はすっかり興奮してしまった。なにしろ皇太子にお目にかかるなどは、大分県にとって歴史的な大事件だ。「皇太子さまをおがみたい」という人々が

弁当持ちで、県庁前から皇太子が上陸されるカンタン港（旧波止場）に至る沿道を埋めつくした。

皇太子には、東郷司令長官がお供をしてきたのだが、日露戦争でバルチック艦隊をせん滅したどえらい人気が記憶に新たな人だ。こどもたちにとつても、あこがれの将軍であった。

皇太子のお乗りものは人力車だったが、その車のカジ棒から紅白の綱を二本長くつけて五、六人の車夫がこれを引っぱったそう。車夫は一世一代の大任務だから、仕立ておろしの紺のハッピに腹かけパッチ、新しいマンジュウがさで、威勢よく走ったわけだ。

この奉迎には、県内の中学生は全部、校長に引率されて大分にやってきた。威徳寺の歌人住職瓜生鉄雄さんの思い出話によると、宇佐中学校の生徒数十人が浜町の威徳寺に宿舎を割り当てられて泊まったそうで、この生徒たちのために、朝早くから近所の婦人も手伝つてにぎり飯を作り、竹の皮につつんでいたのが、こども心に珍しく、台所のはしに立つてながめたのをおぼえているという。

県庁の東北のかどにりっぱなお泊まり所がつくられ、皇太子はその建て物のはしに特別にしつらえられたお立ち台から万歳におこたえになった。

夜はちようちん行列が県庁をとりまき、いまの東側の土手から、城崎一帯に整列しては万歳をとねえた。もちろんそのころの中島一帯は、家はまったくクワ畑だった。土手で万歳をとねえて振り向くと、城崎のクワ畑はちようちんの海で、それが万歳とともに上がったたり下がったたりするのが夢のように美し

かった。そのクワ畑から打ち上げ花火もさかんに上げられた。皇太子の旅情をお慰めするために計画されたものだが、花火がはじけるたびに城の石がきがやみに浮きあがるのが印象的だったと古老は語っている。

皇太子は大分中学、師範学校、女学校などを視察され、春日浦で地引き綱をご覧になった。そのとき大分中学でおかけになったイスが、のちのちまで大切に保存され、イスに最敬礼をさせられたこともある。いまま倉庫の奥にあるそうだ。

思い出の親子松

昭和通りが舞鶴橋までつきぬけて二級国道として面目を新たにしたのは、戦後もつい近年のこと、いまの保健所付近のやぶと、みぞを消して道路が中島循環道路の十字路までやつとどいたのは昭和二、三（一九二七～二八）年にかけて中島裏（そのころまでは、中島というのは、県庁裏の福寿院付近から大分署までのごくせまい区域で、その他は中島裏と称していた）の耕地整理をしてからだ。もちろん県庁前道路のせまい道が畑の中を向こうまでとどいたというにすぎなかった。その先の方は大分商業学校の旧グラウンドがふさいでいた。

さらに現在保健所が建っている付近がレンコン畑だったのを埋めたてたのは、それよりずっとあとの昭和十五（一九四〇）年。第一高女の同窓会が同窓会館を建設する目的で同窓生を中心に金を集めてこれを埋めたてた。

ところが日支事変もドロ沼の様相をていしているころなの

医師会館と武家屋敷の残影



で、横ヤリがはいった。
この非常時に同窓会館
とはなにごとだとはか
り、会館建設はおじゃ
ん。そのまま運動場と
なっていたものを、戦
後県が同窓会に替え地
を与えて保健所を建て
た。

このレンコン畑の東
の方に大きな松の木が
二本あった。一本はと
くに高くてどこからで

も見ることができた。これを親子松と呼んでいた。「今でも第
一小学校の校舎の二階の東の方の廊下の窓から、女学校の方に、
一本の高い松がぬけ出ているのがよく見えるはずだ。あの松を
見て、私がしたように、多くの家はあるの松のどの辺かしらと、
あちこち見当をつけているこどもがあるだろう…」 大正五

(一九一六)年に第一小学校(いまの金池小学校)を卒業した
童話家の小野直さんが、金地小学校五十周年記念(昭和十三＝
一九三八年)に、母校へ寄せる思慕の情を書いた文中の一節。

こども心にも、この親子松が市の中空にそびえていた印象は
忘れられないものだったようだ。いまはこの親子松もないし、
窓からこの松をはるかながめることができた金地小学校の、
古い校舎もなくなった。

この親子松は、豊後の地に配流となった「忠直卿行状記」（菊池寛作）の松平忠直（一伯公）と関係がある。といっても、一伯公を監視するために幕府から派遣された監検使の屋敷がここにあり、その屋敷内に植わっていた松なのだ。

なつかしい思い出の寄りどころが次々と消えていく。そして思い出を語る人も…。

流された長浜神社

悲劇の主人公松平忠直卿の配流地津守での生活を監視するため、幕府が派遣した監検使が住んでいた屋敷は、いまの保健所の南、北町一帯にわたる大きな地域を占めていた。それで、このあたりに「御屋敷」と呼ぶ地名が残っていたが、北町一帯も最近すっかり変わったので、そんな地名を知っている人があるだろうか。

記録によると、監検使の屋敷は北は府内城にたいして、流れに石がきを築き、その石がきは東にのびていまの市営アパートのうしろあたりから南に折れ、長池橋のところまでつづいていた。南側は、いま取り払われつつある善巧寺（新県庁舎東側）と、長池通りの家並みに区切られた広大な屋敷だった。それは府内藩からも独立した一画として、東の方滝尾の津守をにらんでいたわけだ。

歴史をたどると、もっと古い昔には、いま長浜町にある長浜神社がこのあたりにあったという。ここに若宮八幡のお旅所があつて、そのかたわらに、塩九升町の人が海岸から拾ってきた

四国長浜大明神の神鏡をまつた。それが長浜社の始まりだといふのである。

ところが、別の説によると、長浜社のあった地は、府内城の東南のかど（戦後県教育委員会の建て物のあったあたり）らしいといふのである。「雉城雜誌」という古い文書に「今の錦城東の御丸、御広間の辺なるよし」とあり、別の文書には「同慈寺の東北二百余歩の境はなほだ清潔なりとて…」ここに神殿を建立したとある。

同慈寺は後の浄安寺で、現在の農林中央金庫から商工会館付近までにわたる一帯を占めていた。それから推しはかると府内城の東南のかどにあたるというわけ。もつともそのころは、まだ府内城が築かれていなかったのだからそこだったとしても不思議はない。

その後、慶長元（一五九六）年の大地震、大津波で神殿が流された。

かの瓜生島を沈めた大地震である。流された神鏡はその後春日浦で拾われ、春日神社の境内に安置されること二十四年、ようやく元和五（一六一九年）年に塩九升町の東のたんぼの中に神殿を営んで移り、現在の地に鎮座したのは、それからさらに六十二年の後とある。

府内城の天守閣ができたのは慶長の大地震から七年後だから、長浜さまが春日浦の仮住まいをかこっている間に、もとの神域のあたりはすっかりようすが変わって、帰るに帰れなかったわけだ。

それにしても、ずいぶん居を変えた気の毒な神さまだ。

白雉城



白雉城と哀話

県庁移転あとの城跡を近代的な公園にするために、ゴミと泥に埋もれ蚊の発生地になっているお堀を埋めて近代的な公園にしよう。いや府内唯一の古跡を埋めてしまうのは反対だ、お堀を守ろう。と賛否両論がとりまいてる府内城は、新しい都市づくりのあらしの前におののきゆれているように思われてならない。

この府内城、別の名は白雉城と呼ばれるが、築城したときは百雉城と呼んでいたという。

中国の古い文書に「飛びあがったキジ(雉)は一丈の高さで、三丈飛ぶ。そこで城牆の高さ一丈、長さ三丈を一雉として測る」という意味のことが書いてある。福原直高が荷揚城(府内城)を築城したとき「左伝に、都城百雉を過ぎれば国の害なりとある。当城は百雉をすぎないように」といまいめられたので、こ

の城は百雉しかないことを証明する意味で「百雉城」と称したという。それを淡窓などが詩文に、「白雉城」と書いたりしたので、いつかその方が通用するようになった。百雉を白雉とつい書きあやまっ

たのかもしれない。まちがいが本物を追放したというわけ。

もう一つ、この城を「宮が城」と呼んでいる。これには築城哀話がある。

築城のさい娘を人柱にすることになった。そこで「人柱にたつた娘には、その遺族を一生安楽に暮らせるようにする」と、おふれを出して人柱をつのつた、上野六坊に貧しい一家があって、その孝行娘のミヤ（ミワともいう）が一家を救うために応募し生き埋めとなった。それでこの城を「ミヤガ城」と呼んだとある。このミヤをまつたほこらが城の西北のヤグラの下の水ぎわにいまも残っている。城主は月の何日かには西側の堀に舟を浮かべて、この孝女の霊にまいったと伝えられている。

このミヤの遺族の子孫が、近年まで伊藤という名で六坊で農業をいとなんでいたというはなしだ。

大正九（一九二〇）年に県庁本館を新築するとき、知事室にあたる下あたりから牛のツノがあらわれた。

これは、築城のさい人柱のほかに「主人に忠実な猛牛」を、城のえんぎのために城の一角に埋めたと伝えられているから、その牛のツノだろうということになり、当時鈴木三平さんという人が保存した。いまはどこにあるか捜そうという人もいない。

（注）▽県教育会館は今の大大市役所庁舎敷き地の一角にあった。

▽大分保健所は現在の県庁舎敷き地の一角、県職員専用駐車場の位置にあった。

▽商工会館は現在、大分郵便局のある場所が旧位置。



オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタルブック版「大分今昔」 第一章 ● 昭和通りかいわい

2007 年 8 月 17 日初版発行

筆者 渡辺 克己

挿絵 田中 昇（着色：佐藤 克治）

編集 大分合同新聞社

制作 川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社

著者略歴◇ 渡辺 克己

大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十三年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武將と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。